

心ひとつできよくなる

ルカの福音書 5章 12-16 節

はじめに

今日は、イエス様が「**全身ツアラアトに冒された人**」を癒されるという出来事から学びたいと思います。

1. ツアラアトとは

「ツアラアト」とは、新共同訳聖書では「重い皮膚病」と訳され、以前の改訳聖書では、「らい病」と訳されていました。しかし現在では、聖書に出てくる「ツアラアト」と「らい病」は違う病気であるということが分かってきました。聖書に出てくる「ツアラアト」は、人間の皮膚に現れるだけでなく、家の壁や洋服にも現れるものであって、この「ツアラアト」が一体何を意味しているのかは、いまだに分からないというのが現状です。ですから現在、改訳聖書では、「らい病」と訳すのを止めて、「ツアラアト」というヘブル語をそのままカタカナで訳しているのです。

ツアラアトは、「重い皮膚病」と訳されるように、人間に現れる時には、皮膚に現れます。ツアラアトに関しては、旧約聖書のレビ記 13-14 章に詳しく書かれていますが、ツアラアトに冒されると、その人は「汚れた者」とされます。それは衛生的に「汚い」という意味ではなく、宗教的に「汚れている」ということです。ツアラアトに冒されて「汚れた者」とされた人は、ユダヤ人の社会から排除されてしまうのです。

レビ記 13：45-46 には、こう書かれています。「**患部があるツアラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる**」。ツアラアトに冒された人は、自分がツアラアトに冒されていることを「汚れている、汚れている」と叫んで、人に知らせなければなりません。なぜならツアラアトに冒されている人に触れれば、触れた人も「汚れた者」とされたからです（レビ記 22：4-5）。またツアラアトに冒された人は、町の外で、一人で暮らさなければなりません。家族や友人と引き離され、仕事も失い、ひたすら孤独の中で生活しなければならませんでした。

2. 全身ツアラアトに冒された人の信仰

さて今日の聖書箇所は、そのようなツアラアトに冒された人がイエス様に癒されるという出来事が書かれています。彼は、体の一部がツアラアトに冒されていたのではなく、

「全身」がツアラアトに冒されていました。イエス様がおられた当時、ツアラアトは神様からの刑罰だと考えられていました。その人が何か罪を犯したから、ツアラアトになったのだと考えられたのです。当時は、罪とツアラアトが結びついて考えられていたのです。彼は、体の一部ではなく、全身がツアラアトに冒されていました。それゆえ、おそらく彼は、単なる罪人ではなく、何か多くの、また大きな罪を犯した、罪深い者と人々から見られていたことでしょう。

12節には、「さて、イエスがある町におられたとき、見よ、全身ツアラアトに冒された人がいた」とあります。ここに「見よ」とあります。これは驚きを表す言葉です。なぜなら、ツアラアトに冒された人は本来、町の外で暮らさなければならず、町の中に入って来てはいけなからです。それなのに、彼が町の中にいるのですから、驚くべきことであったのです。

彼はなぜ町の中に入って来たのでしょうか。町の中に入ってくれば、人々から非難の目が向けられたことでしょう。しかしそれでも彼は、町の中に入って来たのです。それは、イエス様に会うためです。彼は、イエス様を見つけると、ひれ伏して、こうお願いします。「**主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります**」。

彼はまず、イエス様には「私をきよくすることができる」と信じていました。イエス様にはそういう力があると信じていたのです。しかし当時、ツアラアトは治らない病気であったようです。ルカ4:27には、こう書かれています。「**預言者エリシャのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました**」。ナアマンという人は預言者エリシャの奇跡によって癒されました。しかしナアマン以外は、誰も癒やされなかったのです。つまり、神様の奇跡以外には癒されない病気であったのです。

しかし、ある時バプテスマのヨハネが、イエス様に「あなたはメシア（救い主）ですか？」と尋ねた時、イエス様はこう言われました。「**目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の間こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています**」(ルカ7:22)。ツアラアトが癒され、きよめられるということは、メシア（救い主）であることのしるしなのです。当時、誰も癒せなかったツアラアトを癒し、きよめることができる人がいれば、その人はメシア以外の何者でもないのです。

この全身ツアラアトに冒された人は、イエス様こそメシア（救い主）であると信じ、イエス様なら自分を癒すことができると信じたのです。当時は、一度ツアラアトに冒されれば一生治らないのです。死ぬまで町の外で、一人で暮らさなければならなかったのです。ツアラアトに冒された人にもし希望があるとすれば、それはメシア（救い主）しかいなかったのです。彼は、イエス様に希望をもって、勇気を出して、町の中にやって来たのです。彼にとってイエス様は、最後の希望だったのです。

しかし彼は、イエス様に「癒してください」「きよめてください」と自分の願いをぶつけるのではなく、「主よ、お心一つで」と言います。これは直訳すると、「主よ、あなたが

望むなら」となります。新共同訳聖書では、「御心ならば」と訳されています。何が何でも「癒してください」、何が何でも「きよめてください」と言うのではなく、「御心ならば」と言います。彼は、自分の願いよりも、イエス様の御心を大事にするのです。彼は崖っぷちでした。イエス様が最後の希望でした。もしイエス様が癒せなかったら、彼は死ぬまでツアラアトに冒されて生きなければなりませんでした。そうであるならば、自分の思いを、自分の願いを必死に訴えても良さそうなものです。しかし彼は、そのような状況の中でも、自分の思いや願いよりも、イエス様の御心をまず第一に考えたのです。

私たちが毎週の礼拝で祈る「主の祈り」は、六つの祈りで構成されています。前半の三つは、御名があがめられるように、御国が来るように、御心が行われるように、という神様のための祈りです。後半の三つは、私たちの日用の糧を与えてください、私たちの罪を赦してください、私たちを悪から救ってください、という私たちのための祈りです。「主の祈り」は、イエス様が弟子たちに教えた祈りですが、その祈りではまず神様のために祈りなさい、その後で自分たちのために祈りなさいと教えられているのです。まず神様の御心を求め、その後に自分の必要を求める、これがイエス様の求めている祈りです。彼はまさにここで、イエス様が求めているような祈りをしているのです。自分の必要よりも、イエス様の御心をまず求めているのです。

私たちの祈りは、自分の願いばかりになっていないでしょうか。私たちは自分の思いばかりで、神様の思いを考えているでしょうか。彼は、自分が癒やされるのも癒されないのも、イエス様次第だと、イエス様に自分の病気を委ねているのです。癒されないのなら信じないというのではなく、癒やされないのならそれもまたあなたの御心として受け入れますという姿勢なのです。自分が中心ではなく、イエス様が中心の祈りなのです。その意味で、イエス様に願う彼の姿勢は、私たちの模範と言えます。

3. 手を伸ばして彼にさわり

彼は、イエス様の御心に自分の病気を委ねました。するとイエス様は、「**手を伸ばして彼にさわ**り、『わたしの心だ。きよくなれ』」と言われて、彼を癒されるのです。イエス様は、「わたしの心だ」と言われます。これは「わたしは望む」「御心とする」という意味です。イエス様は、彼が癒されること、きよめられることを望まれ、御心とされたのです。

イエス様は、御自身の御言葉によって、彼を癒し、きよめられましたが、その前に、手を伸ばして彼に触られました。イエス様は数々の奇跡をなされていますが、病人に触らなくても、御自身の御言葉だけで癒すことができました。しかし今回は、彼に触られました。御言葉を語る前に、癒やされる前に、です。それはツアラアトで冒されている状態の時です。触れると「汚れた者」とされた、ツアラアトの皮膚に、です。誰も触りたがらない、誰も触ることのできない部分です。イエス様は、誰も触りたがらない、誰も触ることのできない部分に、手を伸ばし触られたのです。

イエス様はある時、グラサ人の男から悪霊を追い出されました。この人は、墓場に住ん

でいて、足かせと鎖でつながれていても、誰もこの人を押さえることができなかったのです。夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけることしかできなかったのです。家族にも、町の人にも手に負えない、そういう人でした。まさに誰も触りたがらない、誰も触ることのできない人でした。しかしイエス様は、あえて彼のもとを訪ね、彼から悪霊を追い出されたのです。イエス様は、誰も触りたがらない、誰も触ることのできない部分や人に、手を伸ばして触れる方なのです。

先ほども言いましたように、ツアラアトは当時、罪と結びついて考えられていました。ツアラアトの汚れは、罪の汚れと考えられていたのです。その意味で、イエス様は、私たちの罪に触れられるとも言えると思います。しかも誰も触りたがらない、誰も触ることのできない罪に、イエス様は触れられると言えます。私たち人間の罪の問題は、誰もどうすることもできないのです。体や精神的な問題なら病院に行くことができます。そこで手術をしたり、薬を処方してもらうことができます。しかし罪の問題は、病院では解決しません。警察や裁判所は、罪を裁くことはできるでしょう。しかし罪の汚れをきよめることは、誰にもできないのです。罪の問題を扱うことができるのは、神ご自身であるイエス様だけです。

イエス様は、全身ツアラアトに冒された人に触られました。彼は単なる罪人ではなく、罪深い者と見られていました。イエス様は、どんなに罪深い人にでも触られて、その罪をきよめることができるのです。どんなに汚れていても、誰も触れられない、誰も触れたくない、そういう罪であっても、イエス様は手を伸ばして触れられて、きよめてしまわれるのです。

おわりに

イエス様は、彼をきよめられた後、彼に命じられました。「**だれにも話してはいけない。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため、モーセが命じたように、あなたのきよめのささげ物をしなさい**」。イエス様にきよめられた人は、それで終わりではありません。イエス様にきよめられた人は、イエス様が命じられたことに従わなければなりません。イエス様は、律法に書かれているツアラアトがきよめられた後の規定に、従うようにと言われます。それは、彼がもう一度、ユダヤ人の社会の中に回復されるためです。私たちも、イエス様に罪をきよめられたならば、イエス様が命じられたことに従い、交わりの中に回復されなければなりません。イエス様が命じられたことは、今や聖書に書き記されています。私たちは、イエス様に罪をきよめられたならば、聖書の御言葉に従い、教会の交わりの中で生きていかなければなりません。

イエス様は、「誰にも話してはいけない」と彼に言われました。しかしマルコの福音書を見ると、彼はこの出来事を言い広めてしまったのです（マルコ 1：45）。その結果、15節にあるように、大勢の群衆がイエス様の話を聞きに、また病気の癒しを求めて集まって来てしまうのです。ではイエス様は、大勢の群衆を前にどうされたのでしょうか。16節

を見ると、イエス様は、「寂しいところに退いて祈っておられた」とあります。イエス様は、人々の必要に応えるよりも、神様との交わり、祈りを優先されたのです。

私たちは先ほど、全身ツアラウトに冒された人の祈りから、自分の願いよりも神様の御心を第一としなければならないと学びました。このイエス様の姿からは、人々の必要に応えるよりも、神様との交わり、祈りを第一にしなければならないことを学ぶことができます。自分の願いや求めはたくさんあります。また周りの人々の必要に応えるべきこともたくさんあります。しかし私たちは、神様の御心を第一としなければなりません。私たちは、祈りの中で、神様の御心とは何かを見出すことができます。祈らないで、自分の願いや求めのまま突き進んだり、周りの人々の必要に応えるだけの日々が続くと、自分を見失い、自分が何をすべきかが分からなくなってしまうのです。

忙しさの中でも、少しの時間、祈る時を持つ。その中で神様の御心を求めて、自分がやるべきことを見出すのです。祈りの時間を持つ人こそ、自分の願いを神様に委ね、本当の意味で、人々の必要に応えることができるのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、祈りにおいて貧しい者です。自分の願いばかりをぶつけて、あなたの御心を軽んじます。自分の願いにしがみついて、あなたに委ねることのできない者です。また祈ることよりも、人々の必要に応えること、やらなければならない日々の務めを優先してしまします。私たちは、人間の必要や求めに翻弄されながら生活しています。どうか祈る時を与えてくださり、あなたの御心を求めさせてください。あなたの御心を大切にし、あなたの御心に委ねることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。